

いもこごと バイト

エッチなお兄ちゃんを
誘惑するだけの
簡単なおしごとです

小説 舞麗辞

挿絵 しまちよ

立ち読み版



プロローグ バイト de アン♥アン!?

第一話 いもうとのゆーわく!?

第二話 一日妹ちゃんフリーパス、三万円(税別)也

第三話 アニキの童貞食べちゃうぞ!

第四話 そうだ夜這いをしよう

第五話 二人の関係ばれちゃった!?

第六話 さよならを言う前に

エピローグ いもうとご奉仕! くお兄ちゃんに愛情たっぷり倍返しっ♥く

006

047

069

098

152

181

199

253

登場人物紹介

Characters



あさい みゆ
浅井美優

祐介の義妹。最近は急にギャルっぽくなってきてファッションにも敏感。その分先立つものも必要なようで……。

あさい ゆうすけ
浅井祐介

今年受験生ながらも推薦で合格をもらったため、キャンパスライフを謳歌するためにバイトしながら貯金中。

(いやっ、ダメだダメだっ……ここは毅然とした態度で——)

などと奮起しつつも身体は正直なもの。目の前の小悪魔に魂を売り渡せばこれを好きにできると思うと兄の視線は牡の目のものとなり、ついつい妹の肢体へと性的な視線を向けてしまう。

(しかし、コイツってばまだ一年のくせに随分とけしからんケツしてんだな……)

スカート越しに浮かび上がるツンと生意気なヒップラインを目で追いながらゴクリと喉を鳴らしていると、

「あっ、アニキってば今ヒトのお尻見てたっしょ？」

兄の視線に気づいた妹が責めるような一瞥と共に鋭く指摘してきた。

「はっ?! いや見てねーし!!」

とっさに視線を明後日の方に外しつつとぼける祐介だったが、

「あははっ、反応あからさますぎー♪ そんなにお尻が見たいんなら——」

言いながら、美優は一步こちらへ踏み出してくるりと身を翻す。ちょうど腰を下ろしているこちらの足を跨ぐようにして仁王立ちとなった妹は、

「ほーらっ、もっと近くでガン見しちゃえっ♪」

言うが早いそのまま体力測定の立位体前屈の要領で膝を伸ばしたまま腰を曲げた。

くんっ、と鼻先に触れそうなほどヒップが突き出され、視界いっぱい妹のスカート尻が迫ってくる。

「!!!!!!」

(うわっ、けっケツがこんな間近につ——!!)

前屈に引つ張られる形でデニム生地のスカートの裾が持ち上がり、ニーソックスに包まれた太腿との絶対領域は一気に領土を拡大。尻との境目ギリギリまで露出して、桃房の下弦の丸みが布地の下から顔を覗かせた。

(すごっ、ケツほとんど出かかっているっ……!!)

しかし同時に、ここまで大胆なポーズを取っているにもかかわらず妹のショーツはまだ見えない。まるでパンチラNGのアニメみたいに不自然なまでに下着だけが見えなかった。(くそっ、もうちよいで……)

見えないとなると見たくなるのが人情というもの。無意識のうちに腰を前方にスライドさせスカートの中に眠る神秘を捉えようとしてしまう。すると妹はそんな兄の煩悩を見透かしたように、

「さて、突然ですがクイズの時間でーす。妹は今どんなパンツを穿いでるでしょー?」

自ら突き出したスカート尻をパシンと掌で叩きつつ、軽い口調でとんでもない問題を出示してきた。

「当てたらアニキに千円、外れたらアタシに千円ね? ちなみに参加料は二千円になりまっす♥」

「えっ、それ計算合わなくないか……!?!」

妹のボツタクリにどうにかツツコミを入れつつも、スカートのベールの向こうの未知の世界に意識と視線は釘付けのためそれ以上は何も言えない。

(くっ、ヒトをからかって遊んでやがるっ……でも実際どんなの穿いてんだコイツ?)

妹の下着の柄など気にかけてたことがない。いや、それは嘘だ。正確に言えば気を向けないうようにしてきた、と言うべきだろう。実際脱衣所に脱ぎ捨てられている美優の衣類、こ
と下着類に関しては努めて見えないふりをしてきた。

(女の子のパンツ、っていったら縞柄とか水玉とか、そんなところかな……けどコイツの性格ならちよつと大人ぶって花柄レースのランジェリーってこともあるし、逆に清楚ぶって無地の可能性も普通にあるか……)

考えてみたら女子の下着は男子と違い千差万別。それを当てるなんてまさに無理ゲーだ。
「さんねーん、時間切れでーす」

頭を悩ませていると三十秒としないうちに妹が「ブッブー」と口でブザー音を鳴らしてヒトを失格扱いしてきた。

「時間切れって……早すぎだしそんなのひとことも言ってない——」

何もしてないうちに三千円を巻き上げられた祐介が重ねての理不尽なルールに抗議しかけたものの、

「ちなみにい、今日のパンツは——コレでしたっ♪」

グイッ！ 妹は兄の言葉を遮るように両腕を後ろ手に回しスカートの裾を掴むと、一気

にたくし上げる。

プリンッ!

剥き上げられたスカートに向こうから躍るようにして姿を現したのは白桃のように色白のまさに桃尻だ。

「なっ——ノーパン!?!」

驚きのあまり声を上げた祐介だったが、よく見るとそうではない。妹の腰から尻の谷間にかけて紐状のピンクの布地がT字にクロスしていた。

「ていつ…:Tバックっ…:?!」

ギャルを気取つてもどこかちよつとコケティッシュな雰囲気のある妹には少しアンパランスな紐下着。下着とはいふものの後ろから見ると尻の露出の方が断然多い。

「そっ、そそそっ、そんなはっ、はしたないモノっ…:?!」

まさかのエロ下着登場に面喰らった兄がどもりながら叱りつけるも、

「あははっアニキつてばふっるーい! イマドキTバックくらい全然普通だつて。ジーパンとか履く時パンティライン見えたら恥ずかしいじゃん?」

妹はこちらの叱責を笑い飛ばした上、冗談めかして右に左に腰をフリフリ。そのたび剥き卵のように白く艶やかな尻頬が、プリンみたいにふるふると震えている。

そんな美臀から伸びる太腿もまた、とつても健康的な肉付きで。間近に見ると肌のきめがとても細かくツルツルとしておりなんと触り心地がよさそうだ。

(すっ…凄くエロいアングルっ…!!)

目の前に突き出された妹尻にはしたなく興奮していると、今度は股間にさわさわとくすぐりたい感触。

「おっ、おいつ何してんだっ…!!?」

慌てて視線を下げればそこには、ズボンの上から陰茎を愛撫する美優の顔が彼女の股越しに見えた。

「なあにつて、一人えっちのお手伝いだつてばあ」

床に頭を向ける形で開いた股の間から顔を覗かせる妹は、困惑する兄の目を見て小悪魔ちつくくに微笑する。

「だっ、だからそんなの誰も頼んでないっ…」

「すごおい、アニキのどんどんおつきくなるうっ…面白すぎっ!」

小悪魔妹は兄の言葉など完全に無視。まるで新しいおもちゃを与えられた子供みたいな無邪気さで、掌全体を使ってさすさと股間を撫で摩ってくる。厚手のズボン越しのため刺激は少なかつたがそれが却つてもどかしく、目の前に突き出されたTバック尻の絶景と妹にこんなことをされているという背徳感も相まって股間はすぐさまガチガチに充血してしまう。

「ふふっ、アニキ感じすぎー。けどこのままじゃパンツの中に射精だしそうで怖いなあ…
いっそのことパンツから出しちゃおっか?」

兄のはしたない反応に勢いを得た美優は、ズボンの上からの愛撫に飽き足らずとうとうファスナーにまで手を伸ばしてきた。

「やっ、あっ……まっ……!!」

(こっ、これ以上はマズイだろう……とっ、止めるなら今しか——!!)

頭の中ではそう思うのに、言葉にならない。だつて身体は確かに彼女の言う通り、より強い刺激を欲しがっていた。ジッパーを開くジジジ……という微細な振動が股間に響くと、期待で充血が一気に加速してしまうのを止められない。

「さあて、中はどうなってるかなあ？」

チャックを下ろしきった美優は微笑を浮かべたまま、大胆にも開いた隙間に手を突っ込んできた。

「うっ!!」

びくんっ！ まだトランクス越しながら先ほどまでとは段違いにダイレクトな刺激に、思わず声が漏れ腰が跳ねる。

「あはっ、アニキ今ピクッて跳ねたあゝ そんなによかった？ じゃあこんなのは？」
にゅくにゅくにゅくにゅくにゅ……兄の反応がよほど面白かったらしい妹は、五本の指をわらわらと蠢かせて下着越しの陰茎を盛んに弄んでくる。

「っあっ、美優っ……もうやめ……んっ、ふあっ!!」

妹の指先の動きに合わせて下半身に甘い電流が走り、思わず女の子っぽい喘ぎ声が断続的

に口をついて出てしまう。

「ふふっ、アニキってばカワイー♥ じゃあ今度は直に触ってあげるね？」

兄を完全に手玉に取った美優はさながらAVの中の痴女のように、有無をも言わせぬ雰囲気だ。痴女妹は器用な指使いでズボンのホックを外してしまおうと、前面がほぼ剥き出しとなったトランクスの前開きの中へ蛇のように手を滑り込ませてきた。

「わ、アニキのこれメッチャ熱いっ……」

ぴくっ。下着の中まで手を差し入れた瞬間、妹はまるで沸騰したヤカンにでも触れたかのように慌ててその手を退ける。しかしすぐに気を取り直し再びトランクスの中に手を突っ込むと、肉根を包み込むようにして手に取った。

ぎゅっ……！

ピアノが似合いそうな細く綺麗な五本の指が、先端から根元までを優しく包み込む。

（うわっ、美優の手…あったかい——）

妹の掌はしつとりと汗ばんでおり、まるで泡立てたばかりのクリームを思わせる柔らかさだ。

「っあ……」

慣れ親しんだ自分の手とはまるで異なる感触に、また女の子みたいな声が出てしまう。限界まで張り詰めていると思ったペニスが更にドクドクと脈を打ち、トランクスを突き破らんばかりにテントを張った。鈴口の当たる部分には早くも先走りがシミを作っていた。

「なんかすつごく窮屈そう……おちんちん、狭いパンツの中から解放してあげるね」
妹は壊れものを扱うような丁寧な手つきで、手を差し入れた前開きから勃起陰茎を取り出しにかかる。

「うああ……やめ、もうやめろつてばっ……」

(なんだコイツの手の感触っ……すぐえ柔らかくてあつたかいっ……!?)

口ではうわごとのように抵抗を示すものの、異性に初めてペニスに触られた祐介は自分の手とはまるで違う温もりの前にされるがままとなっていた。そんな兄の本心を見透かしてか美優はこちらの言葉など意に介さず牡根を弄り倒す。勃起は下着の中で突っ張り棒のように引っかかりなかなかうまくいかなかつたが、悪戦苦闘の末ようやくと引っ張り出すことに成功した。

ぐぐううっ……っぴよんっつ!!

「わっ、出たあっ……あー…アニキつて包茎なんだ」

自ら露出させた陰茎を見た妹は最初その勢いのよさに黄色い声を上げたものの、すぐに残念なものでも目にした口調でポソツと呟き憐れむような半笑いと共に小さく頷く。

「うっ、うるさい悪いかつ!」

あからさまなバカにされように思わず声を荒らげる。思春期の男子にとって包茎と童貞は二大NGワードなのだ。

「えー、だってホーケーって不潔なんでしょー? アタシ変な病気うつされなかなー?」

そんな兄を軽く受け流して、美優は皮かむりの先っちょを指でツンツンとつつきながら意地悪く口元を笑みの形に歪ませる。

「不潔じゃねーし！ おっ、俺のは仮性だから剥こうと思えばちゃんと剥けるんだよ！」

我ながら何をそこまでムキになってと思いつつも口角泡飛ばす勢いで反論すると、
「へえ、剥けるんだあ——よっし、やってみよ」

妹は楽しい理科の実験でも始めるような口調と共に竿をギュッと握りしめてきた。

「ふあうっ!!」

竿全体に喜悦を帯びた温もりが滲む。赤ちゃんの掌みたいに柔らかな感触に一瞬で腰が蕩けるが——。

ぐいっ！

「ひぎいっ!!」

そんな兄の恍惚へと冷や水をぶっかけるが如く、妹は竿を握る手を根元の方へとスライドさせて力一杯皮をずり下げてきた。包皮に包まれていた龟头が一気にカリ首まで姿を現すも、加減のわからない妹は余り皮以上に引き下ろそうとしたため皮が引きつり小さな痛みに祐介は悲鳴を上げさせられる。

「あ。ごめっ、痛かった？」

「らっ、乱暴にしすぎだっ！」

実際はそこまで痛かったわけではないのだが、快感から痛みへの落差が大きかったため

つい大声で叱る。

「そうなの？ ホーケーさんは初めてなので扱いがよくわかりませ〜ん♪ だって元カレも今カレも、こんな赤ちゃんおちんちんじゃないし〜？」

しかし男の痛みを想像できない妹は悪びれもせず、それどころか兄の愚息をデイスってくる始末だ。

（やっぱカレシいたんだコイツっ……しかも包茎がどうかわかるってことは——!!）

おふざけ口調ながらその口ぶりからして妹には彼氏がいる上、そこそこの経験人数まであると知って大きな衝撃を受けていると、

「さあてニオイの方は、つと——あ、ほんとだそんなに臭くない。アニキとか絶対にイカ臭いって覚悟してたのに！」

妹は亀頭にぴとつと鼻をつけるとすんすんと匂いを嗅ぎ、こちらへ視線を合わせながら意地悪なニヤニヤ笑いを浮かべる。

「だっ、だから毎日ちゃんと洗ってるっていつひえうっ!!」

妹の侮辱に反論しかけるも、悲鳴で言葉を途切れさせられる。竿に添えられていた指が、くにくにと肉根を扱ときたててきたのだ。

「ふふ、変な声出しちゃって……そんなに気持ちいいんだ？ 妹にこんなことされて気持ちいいなんてアニキは変態さんだなー。ほーらシコシコー、シコシコー♪」

小馬鹿にしたような口調でそう言いながら、妹は歌うように擬音を口ずさみつつ手の中

の兄を弄ぶ。

（妹にされてるのになんでこんなにつ……ていなかんだこれっ、自分ですると全然違うっ……!!）

彼女の手コキは竿を挿んだ手をただ上下にシェイクするだけという拙いものだったが、自分の思うようにいかない分我慢も利かない。陰囊がジンツと鈍い疼きを孕むとそれは輪精管を駆け抜けて鈴口まで達し、まるで虫刺されにでもあつたみたいな疼痛がツンツと龟头の先へと突き抜けた。

「うああ……やめっ、もっもう射精するっ——」

自分でも驚くほど早く迎えた限界の予感に祐介が叫ぶと、

「えっ、もう!! ダメよまだ射精しちや！」

兄のエマージェンシーコールを聞いた妹の手がぴたりと止まった。

「え……?」

口では待ち望んでいたはずの制止だった。しかし上り詰める手前で寸止めされた格好の少年は、思わず漏らした戸惑いの言葉の中に不満を滲ませてしまう。腰の疼きを堪えつつ妹の顔を見上げると、

「ね、このままイキたいっしょ? 気持ちよくしてあげるから、援助してよアニキい♥」

そこには寸止めに震える兄を面白がるように睨めつけるイジワルな笑顔があった。

「そっ、そんなっ……けど援助だなんてっ……え、援助みたいな真似っ……!!」



椅子の上で身体をくの字に曲げたまま、妹は涙目で愛想笑いを振りまく。しかし事情を知っている兄の目からすると全然大丈夫なんかじゃないのは明らかだった。半開きの唇は小刻みに震え、頬を赤く上気させ。潤んだ瞳は喜悦をぐつと押し込めるように幾度となく強い瞬きを繰り返している。椅子と秘唇の間に挟まれたローターがけたたましい勢いで振動している様子が、祐介には透けて見えるかのようなうだ。

（うわあ、エロいつ…どこも見えてないのに、下手なグラビアよりエロいなこれっ）

最強振度で踊り狂う淫具、妹はそれがどうにか音漏れしないよう必死に股を閉じ、股間に置いた手でギユウツと恥丘の辺りを押さえつけている。

椅子の上でうずくまるように体軀を曲げた妹はこちらを上目遣いに睨みつけており、その顔にはハッキリと「もう無理！ マジ無理!!」と筆で殴り書きしてあった。

（さっ、さすがにこちら辺が潮時か——）

このままでは本当にばれかねない。そうでなくても妹の口からこれ以上の、自分の残り少ない学園生活が不利になるような話が飛び出さないともしれなかった。

「あっそうだ、母さんに買い物頼まれてたんだっけ。美優、行くぞ？」

引き際を見極めた祐介は妹の手を取って強引に立ち上がらせると、コートを羽織りそのまま逃げるように出口へと向かう。

「えっ、うっ、うん——それじゃ皆さんこれでっ！」

手を引かれた妹は一瞬ほっとしたような安堵の顔を覗かせると、クラスメイトへ向けて

愛想を振りまきつつ後へと続く。

「えー、もう行くのかよー？」

「美優ちゃん、また遊びにおいでー？」

クラスメイトから惜しまれながら三年の教室を後にする。十分足らずの談笑だったのに、妹はまるで何時間も正座していたみたいなひよこひよこ歩きだ。

「もうっ、危なかったんだからね!？」

廊下を曲がり周りに生徒の影が見当たらなくなったところで、美優が改めて兄を非難してきた。妹の足取りはやっぱり覚つかなく、階段もわざわざ手すりに掴まって降りている。

「ほう、実に興味深い——いったいなにがどう、危なかったんだ？」

人気がないのいいことに祐介は妹に肩を寄せ、スカートの中へと手を忍び込ませる。

「ひゃっ!? やだっ誰かに見られたら——」

美優はとっさに兄の手を払いのけようとするものの、

「フリーパス」

祐介が発したその一言にお金を受け取っているのを思い出し、すんでのところで踏みとどまる。悪魔のパスポートを手に悠々と妹のクロッチを撫で上げると、渡したローターはちようど恥丘の部分にあてがわれているようで、ビリビリとした振動が指先に伝わってきた。淫具を避けるようにして股布を指で軽く押し込んでみれば、まるで高野豆腐を箸で摘んだみたいにしゅわりと熱い汁が滲んで指を濡らした。

「うわっ、お前濡れすぎだろ……まさかお漏らししたんじゃないだろーな？」

無論失禁などしていいのは百も承知だが、わざとイジワルを囁いてやると、

「してないわよ馬鹿あつ……こつコレ……ほんとにヤバいんだよおつ」

妹は兄のイタズラから逃げるように駆け足で階段を降り切る。

昇降口を出た二人は学園前のバス停へ。バスはどうやら行つたばかりのようで、停留所に学生の姿はない。

「ほら、ベンチ空いてるから座つたら？」

次のバスを待つ間、親切ぶつて席を勧めてみたものの、

「ご親切はキョーシユクですがけっこうです！」

妹はギロリとこちらを睨みつけ断固拒否。フリーパスの力は絶対のはずだが、妹の眼力

はそんなことを言わせない迫力があつたためおとなしく二人並んでバスを待つことにした。

(まあまだお楽しみは始まったばかりだしな——ムフフ)

やがてやつてきたバスは下校の時間帯だけあつて他の学園の生徒らで結構混んでいた。

「ほら美優、もうちよい奥の方に詰めるよ」

後からやつてきた学生の数もそこで、続々と乗り込んでくる学生の波に乗った祐介は脱いだコートで悠長に畳んでいる妹を後方へと追い立てる。

「ちよっ、急かすなっつーの……アニキもコート脱がないと降りた時寒いよ？」

彼女の身長ではつり革は高すぎるのか、美優は手すりにしがみつきつつそんな忠告をく

れるものの、

「俺はいいんだよ、これで」

祐介は意味深な笑顔を浮かべつつ妹の背後に陣取った。

「ねっ、ねえアニキっ……そろそろコレっ……止めてもらっちゃダメ？」

バスが発発してすぐに、妹がお漏らしを我慢する女児みたいに内股をスリスリさせながらお願いしてきた。ローターは強度こそ弱に設定してあるものの、未だスイッチを入れたまま彼女の秘芯を苛み続けていた。

「残念だがそれはできない相談だな。だいたいこれからが本番だぞ」

兄は妹の懇願をピシヤリとはねつけ、同時に意味深な言葉を漏らす。

「本番ってなんの——ひゃっ!？」

言いかけた妹が悲鳴と共に肩を窄ませた。兄がスカートの中に手を突っ込んでお尻を撫でたのだ。

「このままバス降りるまで痴漢するから」

逆ハート形のヒップを撫で回しながら耳元にそう告げる。

「はいい!? 痴漢するって……ばれたらアニキだけ捕まっつてよね」

身も蓋もない犯罪宣言に呆れ顔の妹はそう釘を刺してくるが、

「心配するな、何で俺がバスの中でもコートを着たままだと思っつてんだ」

そう、祐介がコートを脱がなかったのはこれが目的だった。妹の背後にぴったりと密着

しているためコートがカーテン代わりになり、車内の混雑も相まって二人の触れ合う下半身部分は完全な死角となるのだ。

おかげで誰にも見咎められることなく、兄は悠々と妹の左右の尻山を∞マークを描くみたいに撫で回すことができた。

「やだ、なんか触り方えっちいっ……まさかアニキ、常習犯じゃないでしょーね？」

執拗なローター責めで全身が敏感になっている妹はショーツ越しのアプローチにピクツと肩を跳ねさせ敏感に反応してくる。

「失礼な。俺はあくまで（変態）紳士だぞ——」

妹の邪推を一蹴した祐介はしかし紳士らしからぬ横暴さでスカートの更に奥へと手を突っ込んでパンツのゴムを引っ掴むと、桃の薄皮を剥ぐようにぐいっと引き下ろしてしまった。股座とクロッチの間に挟み込まれた淫具が転がり落ちないよう、お尻だけ丸出しにしたところで脱がすのをやめる。

「やっ、パンツ脱がすとか痴漢ってレベル超えてるしっ……!?!」

抗議の声を上げる美優だがこの満員バスの中では逃げ場もなく、せいぜい腰を小さく左右に揺さぶって手を払いのけようと頑張るのが関の山だ。そしてもちろん、その程度で痴漢兄の魔の手を退けることなどできるわけもなかった。

（そーいや美優のケツ、直接じっくり触るのは初めてだな——）

期待に胸を膨らませつつ裸の臀部に指を這わせてみると、発情に火照った尻たぶは軽く

熱を持ち、真冬にもかかわらずじつとりと汗ばんでいた。

（おおっ、柔らかかったかむっちむちっ！ こりや世の中痴漢が後を絶たないわけだ）

あまりの触り心地のよさに少年は妹の臀部の弾力を計測でもするように右、左、また右と尻谷間を何度も往復し美事な双臀をムニムニと揉み比べる。このまま終点まで触り続けたら最高の感触だった、せつかくのフリーパス。お尻だけなんてやっぱりもつたない。

（あつ、アソコの方も……触っていい、かな——？）

美臀の感触を思う存分堪能した兄が次に目をつけたのは秘められた異性の花園だ。今までの「バイト」でもダイレクトにそこへと触れたことはないが……。

（本番以外は何してもいいって約束だし、今日が最後なんだから——いっちゃっても、いいよな!?!）

妹の言質げんちとこれが最後という免罪符に意を決し、桃割れに沿って前の方へと指を這わせてゆく。省エネなのかバスの中はこの人混みでもまだ少し寒かったが、妹の下着の中だけはまるで使い捨てカイロでも突っ込んであるみたいに熱を孕んでいた。

さらに奥へと指を滑り込ませてゆくと——。

（うわっ、熱っ!?!）

くちゅりっ……熱湯のようなぬめり気が不意に指先を焼く。ショーツの中、熱く蒸れた熱帯雨林の奥底では燃え盛る一輪の百合の蕾が煮えたぎる蜜を潤ませ咲き綻んでいた。

(これが女の子のアソコ……みっ、美優のおま〇こ——!!)

生まれて初めて触れた女性器の生々しい滑りに思わず息を呑む。興奮で眩暈を起こしそうになりながら、暗闇の中で落とし物を探すみたいに股座に指を這わせ陰唇の形状を探る。ぬちゅっ……くちゅっ……!!

妹の姫百合は煮込んだゼリーみたいに熱く、ぐずぐずに蕩けているかのよう。もちろんそんなことはあり得ないのだろうが指に絡んだ沸騰寸前の愛蜜が孕んだねっとりとした感触は、まるで妹の秘所が自らの発した熱に蕩けて流れ出しているかのようだった。

「だ、ダメだよアニキっ……こっ、こんなにヒトがいるのに——」

軽くお尻を触られる程度と思っていたらしい妹は、背後に立つ痴漢兄の暴拳をやめさせようとこちらの手首を捕まえるものの。

くちゅくちゅくちゅくちゅ……。

「んひっ、ひやめっ、ゆびいそんな……んああっ!!」

指を秘唇の端から端までなぞるように往復させると、その手は簡単に弛緩してしまった。指愛撫に対する彼女の反応はあからさまで、兄の指が割れ目を前後にスライドするたび、指の動きに合わせるように犬のマウンティングよろしく腰をカクカクと前後させている。

「おい、あんまり動くとさすがにバレるぞ? まあバレたい見られたらいいなら別だけど」

耳元に意地悪を囁いた兄は同時に追い詰めるように更に激しく股座を擦る。膣内なかに指は挿入いれておらずただ闇雲にクレヴァスをなぞっているだけだったが、それでも妹は面白い

ほど感じてしまう。

（うわー、腰なんか振っちゃって……こいつってほんつとに敏感なんだな）

執拗な秘唇責めに、姫割れからは湧き水みたいポタポタと妹の本気汁が滴り落ちて掌に溜まってゆく。掌がふやけるほど大量な発情の証に、祐介もまた空腰を使いたいほど興奮させられてしまう。股間の疼きを抑えきれなくなった少年は、

「金を払ってるのは俺なのに、お前だけ気持ちよくなってるのは不公平だよなあ。せつかくだからお兄ちゃんも気持ちよくしてもらおうか」

一旦手を引きズボンのチャックを開くと、トランクスの前開きからペニスを取り出してみせる。そこはもう鋼のように硬く、塔のように力強くそそり立っていた。

コートのおかげで妹のスカートを捲り上げても周りからバレる心配はない。それをいいことに祐介はピンピンに張り詰めた勃起で妹の裸の尻をペチペチと叩く。

「ひゃ!! なんでアニキおちんちん出してっ……まっ、まさかこんなところで…挿入れようとしてるんじゃない?!」

剥き桃を打たれた妹が強姦の予感に身を固くする。

さすがにこんなところで挿入はできない。しかし怯える妹の様子に嗜虐心を掻き立てられた祐介はあえて肯定も否定もせず——口で答える代わりに腰を大きく前へと突き出してみせた。

にゅるるるるううう——つつ!!

勃起ベニスとは妹の柔尻の谷間を滑り降りるようにして両脚の付け根へと潜り込み、股間の隙間を穿つ。亀頭のエラのでっぱりが秘裂のクレヴァスをなぞるように一閃し、鋭い快感が桃色の火花となつて舞い散つた。腰に衝突しひしゃげる妹尻の感触は、さながらつきたての餅のように柔らかく温かだ。

「ふぁうんっっ♥」

喜悅の火花は妹にも飛び火し、美優が誰の耳にもそれとわかるほどの嬌声を上げた。

「ばっ、声がでかいっ!!」

予想以上の大声に肝を冷やす祐介だったが、バスの中は下校ラッシュで何校かの学生が入り混じり騒がしかったため、妹の喘ぎを耳に留めるものはなかった。

「んうう……あつ、アニキ……なに、してんのお……?」

秘唇を激しく摩擦されてなお、美優はまだ自分が何をされているのかわからないらしい。戸惑いの表情を浮かべたままこちらと下半身に交互に視線を向けきよろきよろしている。

「なんだ、お前素股知らないのか」

「すま……たあ? なにそれ菓子?」

「それはすあまだ」

妹のリアルボケに突っ込みつつ、その性知識の偏りを不思議に感じた祐介だったが、(まあカレシとはやらないよな、こんな中途半端な行為……)

そう、恋人ならこんな行為容易にスキップして一気にセックスをするに違いない——そ

う思うと腕の中の妹との間に越えられない壁を認識させられ、嫉妬の炎が胸を焼いた。「こら、あんまり変な動きしていると本当に見つかるぞ。お前はしっかり股を閉じて立ってればいいんだよ」

苛立たしくなった少年は叱りつけるように言いながらパシンと妹の太腿を打つ。

「う、うん……」

未だ不安に駆られたような声ながら従順に返事をした美優は、言われるままに脚をしつかりと閉じる。途端に陰茎を左右からプリプリの内股が挟み込んできた。張りのある弾力を味わいながら腰をゆつくりと引いてみると、青龍刀のように硬く反り返った剛直が糸鋸いとのこのように秘裂を抉りくちゅりい……と卑猥な粘音を奏でた。

「んひっ!? やつ、だああ……!!」

妹の下着はバックの部分しか降ろしていないため、ローターは今も彼女が一番敏感な部分に当てられたままだ。おかげで妹の股にペニスを根元まで差し込むと、先端にローターが当たり強い振動がこちらにも響いた。

（うわっ、ローターって凄い刺激っ……こんなはずとクリに当ててたら、そりゃ腰も砕けるよな）

自分でやらせておきながら妹に同情する兄はしかし、もちろんやめてやる気など毛頭ない。それどころかバスの揺れに合わせて腰をリズムカルに前後させ、ローター責めにほぐれきった姫割れを思うままに苛め抜く。

ぬちゅっ、にゆるっ、くちゅっ、にゆるううう……!!

妹の陰裂は焼きたてのパンケーキみたいにふわふわと柔らかく、煮詰めたメイプルシロップのような熱い蜜が竿にぬちゃぬちゃと絡みついてくる。割れ目を彩る薄手の大陰唇はまるで男根を捕食したがついているみたいにチュウツと吸い付き、左右からむつちり挟み込んでくる太腿の弾力も大いにペニスを楽しませてくれた。敏感すぎる裏筋だけは刺激を受けないものの、性体験のない祐介にはそれくらいがちょうどよかった。竿の上側で味わっているような陰唇の滑りを裏筋に受けようものなら、光の速さで暴発していたことだろう。(うわー、素股ってこんな気持ちいいのかっ……!!)

時折触れてくる陰毛が不意打ちのように与えるチクリとした感触も、蕩ける秘唇の甘さの中では絶妙なスパイスだ。前後運動にふらふら揺れる玉袋を降ろしかけのショーツにくすぐられるのがなんともこそばゆい。腰を打ちつけるたびムチッと弾ける臀部の弾力もまた、まるで妹を立ちバックで犯しているような背徳感を演出した。

(すごいっ、こうしていると美優と本当におま○こしてるみたいっ!?)
にちゅっにゅちゅっぐちゅぬちゅくちゅくちゅ!!

性器同士の擦り合いはセックスのギリギリ一歩手前といった感じがして、本当に妹を犯している気分になる。妹は既に内股まで自らの漏らした愛液でびっしょり。竿全体を熱く滑る牝肉に揉みくちやにされ、本当は既に挿入はっいっているんじゃないかと疑いたくなるほど気持ちいい。



「お兄ちゃんはいつもしてるとはしゃないっ……たまにはアタシがお兄ちゃんのおっぱい、気持ちよくしてあげよつかあぁ？」

兄の反応に妹はニヤニヤと笑いながら舌なめずり。服の中に手を潜り込ませ直接乳首をツンツンと小突いてきた。

「ふあっ!! まっ、待て美優っ……!!」

下半身でしか感じるなどなどないと思っていた性感を思わぬ場所から発掘されて、未知の感覚に祐介が戸惑いの声を漏らすものの、

「やだーお兄ちゃんピンカ〜ン♥」

妹痴女は意に介さずこちらの服を捲り上げてくる。

「ほーらお兄ちゃん、バンザイして？」

小さい頃彼女の着替えを手伝ってやった時みたいに美優が促してくる。おとなしく従った祐介だったが視界が塞がれた瞬間、なぜか服を脱がす手が止まってしまった。

仕方なく自分で脱ごうと袖を掴んだ刹那。

にゆるううう……っつ!

「ひゃうっ!!」

熱く柔らかで濡れた感触が胸に吸い付いてきて、思わず女の子みたいな声が少年の口をついて出た。目は見えないが感覚でわかる——妹が乳首を舐ってきたのだ。

「こっ、こら美優っ……なにしてんだっ!!」

暗闇の中でもがきながらようやく服から首を抜くと案の定、胸板には妹が顔を斜めにし
てぴつとりと吸い付いていた。

「んふふっ、おっぱい気持ちいいでしょ？ もーっと気持ちよくしてあげるねっ？」

言いながら妹はこちらに身体を預けるようにして体重をかけてきた。当然兄はそのまま
ベッドの上に仰向けに倒れこむ。マウントポジションを取った美優はガチャガチャのスラ
イムみたいにこちらの胸板にベッタリと張り付き、出るはずのない母乳を欲しがるように
執拗に乳首へと吸い付いてきた。

「んああ…ふふっ、お兄ちゃんの手クビい、すごく硬くなっちゃってるよおお？」

んべえっ、と舌を伸ばした美優の口元からは透明な唾液が蜂蜜みたいにとろとろと流れ
出る。妹はそれをたっぷりと絡ませながら、乳輪全体をにゆるにゆると舐め回し、あるい
はむしゃぶりつき、時には甘噛みまでして性感を引き出してきた。

にゆるっ、にゆるっ、にゆるっ、れろれろおおお…はむっ、かにゆかにゆっ！

「やっ、だめっ…こらっ、美優っ…んうっ!!」

(気持ちいいっ…ていうか、なんか切ないっ!! 胸って男でもこんな感じるのか…!!)
経験がない分堪えの利かない乳悦に翻弄されて、祐介はベッドの端を掴んでビクビクと
全身を痙攣させる。妹はそんな兄の様子を面白がって執拗に乳首を苛めつつ、その手を下
半身へと伸ばしてきた。

ぎゅっ…!!

「んあっ……!!」

ズボンの上から股間を鷲掴みにされて、慣れ親しんだ快感に安堵にも似た喘ぎが漏れる。「すごいいい、おちんちんもおこなピンピンにしてるううう……」

掌で感じた勃起に妹はようやく乳首を解放すると、四つん這いの姿勢で兄の下半身へと下り、

んあっ…はむっ♥

服を脱がすのさえもどかしい、とばかりにズボンの上から兄の股間を頬張ってきた。はぐはぐと甘噛みしながらベルトを外し、続いてホックにも手をかける。そうしている間にも布地越しに熱い唾液が染み込んで股間の疼きを倍加させた。

ズボンを脱がせる間も美優は決してペニスから口を離そうとせず、チャックを開きながらテントを張ったトランクスを激しく舐り続けた。おかげで祐介の下着はまるで失禁したみたいに股間の部分だけがびしょびしょになってしまう。

「ほーら、お兄ちゃんのおちんちん、見えちゃうよー？」

こちらの羞恥を煽るように甘く嘯きつつ、女豹のような仕草でトランクスのゴムを啜えて引き降ろす。既に妹の唾液まみれになった男根はぬらぬらといやらしくテカリながら天井を指してそそり立っていた。

「おちんちんっ♥ お兄ちゃんのおちんちんっ——はうんっ…んっ、むうおおっ♥」

兄のペニスを前にした妹は、大好物のキャンディを差し出された子供みたいに目の前の

肉棒へとしゃぶりつき根元まで一気に飲み込む。

「うおっ：美優の口のなかつ、すごいあったかいっ……!!」

いつもよりずっと熱い口腔内部は唾えられたそばから蕩けてしまいそうな心地よさ。しかも今しがたまでケーキを食べていたせいか口の中に残った生クリームの滑りがいつものフェラチオとはまた異なる、なんともねっとりとした感触を与えた。

「んっ、お兄ちゃんのおちんちんっ……なんだかちよつと甘あい♥」

自ら勃起へとまぶした唾液の甘みに美優が淫靡な微笑を浮かべる。妹は肉竿へにゆるにゆると舌を絡ませ、同時に太いストローでシェイクを啜るみたいにぢゅるぢゅると吸い付いて盛んに射精を促す。普段より明らかに濃厚なフェラチオに腰が何度も浮いてしまう。

ちゅむっ、じゅぶっ、ちゅばちゅば……じゅるっずぞぞるるっ!!

「きっ、今日のお前なんかエロいぞっ……んんっ!!」

「ほんなほはいほおー(そんなことないよー)?」

そんな返事とは裏腹に美優はますます大胆に痴女行為をエスカレートさせる。その愛らしい顔を兄の陰毛に埋め、形良い小鼻を豚鼻になるほどひしゃげさせて。自らイラマチオをするようにペニスを根元から貪る。自分の股間に妹の顔が押し付けられている——性的すぎるその絵面^{えづら}だけで少年はあわや暴発してしまいそうだ。

もちろん祐介を射精へと誘おうとしていたのは視覚だけではない。口の中では舌がニュルニュルと絶え間なく蠢いて龟头からカリ首、裏筋までを丹念に舐め磨き、唇は強弱をつ

けた締め付けで竿の根元を揉みあげてくる。その動きはまるで輸精管からザーメンを汲み上げようとしているかのよう。こつてりとしたおしゃぶり攻撃に少年は腰から下が飴湯漬けにでもされたかのように甘く弛緩し、送り込まれる快感にただただ恥ずかしく鳴かされるばかりだ。

(気持ちよすぎる……けど、されてばかりつてのものな)

こちらばかり責められているのがなんだか悔しくて、再びスカートの中に手を伸ばす。相変わらずぐしょ濡れのショーツは気化熱のせいか先ほどよりだいぶ冷たくなっていた。

「こんなの穿いてたら風邪ひくぞ。脱いじゃえよ」

「うっ、うんっ」

美優は兄に言われるまま肌に張り付いたびしょ濡れのショーツを腰をくねらせつつもどかしげに脱ぎ去る。捲れたスカートから覗いた紅潮尻がなんとも扇情的だ。

「ほら、挿入れる前に美優のも口でしてやるから顔に跨がつてみな？」

続けざまにシックスナインを命じると、

「やんっ、顔に跨がれとかお兄ちゃんのスケべっ、ヘンタイっつっ♥」

なんて言いながらも妹は躊躇うことなく自らスカートを脱ぎ去り、隠すもののない股間を曝け出したままベッドの上に寝そべる兄の顔の真上で起立する。

(うわー…このアングル、とんでもなくエグいな……！)

まるで汲み取りトイレの真下から覗くような卑猥すぎる絶景に、少年は初めて女性器を

見たように息をするのさえ忘れ天空に咲き乱れる花園に食い入るように見入る。

「お尻、降ろすよ？」

美優がゆっくりと膝を折ると、望遠鏡の倍率を上げるように甘く熟れた巨桃が濡れそぼつ姫百合とひくつく菊花を従えて視界いっぱいに迫り来る。しかし美優はなかなか最後まで腰を降ろしきろうとしない。おそらくこちらの顔をお尻で踏んづけないように気を回しているのだろうが、目の前で美酒の滴る肉壺を見せつけられてのこの状態は生殺しとしか言いようがない。

はぐっ、ちゅむっ、じゅるるううつつ!!

少年は我慢できず、花園を迎えに行くように頭を上げて愛蜜滴るピンクの肉果実へとしゃぶりつく。

「やんっ♥」

予期せぬ兄からの先制攻撃に驚いた妹は浮かしていた腰をストンと落とし、そのまま兄の顔へと座り込んでしまう。

んぐっ…んっ、ちゅっ、じゅるっじゅずるるううう…!!

口元を股座に塞がれつつも鼻呼吸はできるため窒息の心配もなく、祐介は心置きなく女陰の甘い蜜の味を堪能する。激しい音を立てて姫割れが湛えた愛液を一滴残らず啜り上げると更に膣口へと舌を伸ばし、膣内の粘膜をこそぐみたいにグリグリと舐め回していった。

「んあっ、したっすごい奥まで伸びてくるうう……ひんっ、ひんううう……♥」

蜜壺をほじくり返すような兄のクンニリングスに、美優も負けじと女陰を擦りつけるみたいに腰を前後にずりずりと揺さぶる。視界いっぱいには広がる白桃尻は肌のきめ細かさももちろん、毛穴の一つ一つやそこから生える産毛まで見て取れた。目と鼻の先に開く桃谷間では美味しそうな桜色のアヌスがひゆくひゆく恥ずかしそうにひくついている。

このままこっちのペースに持ち込もうと思った祐介だったがしかし、今日の妹はやられてばかりではいなかった。

ぶにつ、ぶにぶに……。

「んぶあ!？」

夢中で妹膣を舐っていた少年が思わず悲鳴と共に舌を引っ込める。美優がおしやぶりはそのままに、竿の下で所在なさげにぶら下がっていた陰囊をつついてきたのだ。

「せつかくだからこども気持ちよくしてあげよつかああ？」

「やっ、待て美優っそこはダメだつて——」

以前も一度だけ美優に触られたことがあるもののやっぱり怖くて、エッチの時もそこへのタッチは遠慮してもらっていた。脆弱な急所への攻撃を前に逃げ腰の祐介だったが、

「いったただつきまゝすっ♡
はむっ♡ はぐはぐっ♡

妹は逃げようとする兄の尻を両手でがっちり捕まえると、竿の真下にぶら下がる鞞丸二つを同時に丸呑みしてしまった。

「ふああっ!？」

ジンッ、と深く突き刺すような刺激が牡腰全体に響き、ただでさえ硬く屹立していたペニスがるで真ん中に真鍮の芯を通されたみたいにピンッと反り返る。

幸い妹が優しく口に含んでくれたため痛みはなかった。そこにあるのはペニスで味わうのとはまるで異なる鈍い喜悅だ。

「あつ、美優……そんなしたっ動かすのは……くあうっ!」

（うわっ、玉しゃぶられるの、こんな気持ちいいのかっ……!!）

妹の舌の上でレロレロと舐め転がされると二つの陰囊はウズウズともどかしい疼きを孕み、あたかも秒単位で精子が増産されてゆくかのようだ。

「んふふっ、気持ちよさそーな声出しちゃってっ……舌の上でタマタマころころされるの、そんな気持ちいいんだあ？ もっと前からしてあげればよかったね？」

兄の敏感な反応に喜んだ妹は更にじっくりと玉舐めを施してくる。柔らかい牝舌はねっとりと唾液を袋にまぶすよう蠢き、袋に刻まれた皺の一本一本を引き伸ばすみたいに吸い付く。睾丸を口に含まれちゅうちゅうと吸い付かれると堪らない喜悅が瞬いて、まるで袋越しに直接精液を吸われているような錯覚を覚えた。

目の前の姫割れもお返しを欲しがるとくちやくちやくと淫らな開閉で愛撫をねだっていたが、噎せ返るほど濃密な牝の発情臭にもう前戯どころではなくなっていた。

「みっ、美優……もう舐めるのいいからさっ……いつ、挿入れよう……よおっ……!!」

腰をガクガク揺さぶりながらセックスを乞うと、妹は待ってましたとばかりにこちらと身体を入れ替えようとするものの。

(あれ……やばっ、なんか腰っ：抜けたみたいで——立ち上がれないっ!!)

あの背筋がゾクゾクするような玉舐めのおかげか、下半身に全然力が入らない。

「どうしたのお兄ちゃんっ、はやくっ、はやくおま○こしよーよお！」

美優がもどかしそうに内股を擦り合わせながらセックスをおねだりしてくるが、ここで「腰が抜けました」とは恥ずかしくて言いづらい。

「たっ、たまには美優が上に乗ってみるか？」

そこで苦し紛れに騎乗位を提案してみると、

「アタシが上になるってこと？ いいよ、今日はお兄ちゃんのこと犯してあげるっ♥」

幸い痴女モードに変化した妹はやる気満々。ベッド上に立ち、兄の勃起の上で仁王立ちの姿勢を取る。

「えへへ……それじゃいくよ、覚悟してよ♥」

美優はこちらを向いて股間の上で膝立ちになると、ペニスに手を添え狙いを定めながらゆっくりと腰を降ろしてくる。

ずぶっ、ずぶっずぶっずぶっずぶっ——っつ!!

潤んだ秘唇と唾液にまみれた犠牲器は、重力の助けもあつて今までにないほどスムーズに合体を迎えることができた。訪ねてきた恋人を出迎えるように、膣肉がペニスを熱く甘

く強く抱きしめてくる。

「んっ……奥まで、入ったああ……!!」

真下から一気に串刺しにされた美優は天井を見上げるように顎を反らせてわななく。体重を預けてくるお尻の感触がまるでつきたての餅を乗つけたみたいで心地よい。

しかし妹はペニスを咥えこんだままじつとして、なかなか動こうとしなかった。せつかく挿入したのにこれではじれつたくて仕方がない。

「ちよっ、美優、動けよ……」

堪らず祐介が下からぐいっぐいっつと腰を突き上げて抽送を促すと、

「そ、そんな急かささないでよっ……これっ、すっごいんだからああ……!!」

美優は挿入の一撃だけで軽く達してしまつたらしく、兄の上に腰掛けたまま強張らせた身体をふるふると震わせていた。

「おっ、おい大丈夫か？」

「へっ、へーきっ……今すぐっお兄ちゃん気持ちよくしてあげる……からあっ」

艶めかしい吐息を囁み殺しながら強気の宣言をした妹は和式便器へ跨がるようにベッドの上に足をつき体勢を整えると、快感を堪えながらゆつくりとお尻を上下に振り始める。

ぬちゅうううっ……ぐちゆるううっ……ぬちゅいいいい……ずにゆぶうんっ!!

「やあああっ……じっ、自分で動く……のっ……こっんな……感じちやうなんてえっ……!!」

美優はまるで重力が何倍にもなつたみたいにプルプルと震えながら必死になつて腰を持

ち上げ、やがて耐えきれなくなつてはずんつと大きなお尻を落とし自ら剛直に根元まで刺し貫かれる。妹の秘裂から生まれては飲み込まれる陰茎は彼女の漏らす蜜にまみれ、まるでニスでも塗つたかのようにテラテラと濡れ光っていた。

「すごい、っ……美優の腰振り、めちやくちやエロいよっ！」

足場の悪いベッドの上で踏ん張っているためか、いつもより締め付けが強い。ともすれば一気に射精させられそうな快感の中、セクシーなロデオダンスを披露する妹へ賛辞を贈ると、

「やあんっ、言わないでよっ……そんな、恥ずかしい……ことっ……!!」

ツインテールを振り乱しかぶりを振るも、その貪欲な牝腰は止まるどころかますますヒートアップ。の字を描くようにぐりんぐりとグラインドして啞えた肉棒を振り回す。

「ひゅごっ、きもちい……いっ……だめ、腰とまんないっ……よおお♥」

上体を支えるため兄の胸板に手をついた美優は、真っ白なお尻を一生懸命上下させ快感を貪る。抜き差しを繰り返す結合部からは早くも妹の分泌した愛蜜が溢れ返り、にちゅにちゅと卑猥な粘膜音を奏でていた。

(こっ、この角度で見る美優もエロいな……!)

見上げた妹はこちらが見降ろされているせいかいつも以上にSっ気を感じさせる。喜悅に緩んだ口端から溢れる唾液を舐めとろうと舌なめずりをするその顔を見ているだけで射精してしまいそうになるほど官能的だった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!